

カッパ塾 第2期

第1回例会 日時：2010年（平成22年）10月23日（土）14時～16時

会場：ももちパレス 3階特別会議室

内容：①第1期目の報告と総括

②基調講演

テーマ「早良の政治・哲学を考えるために」

講師：施 光恒（せ・てるひさ）氏

（九州大学大学院比較社会文化研究院准教授）

●主宰者挨拶

（玉井）こんにちは。カッパ塾の発足を昨年（2009年）の4月に開催し、その後、昨年の12月まで4回開催しました。第2期は今年（2010年）の4～5月には始めたいと思っていましたが、遅れまして今日になってしまいました。

第1期の活動内容は、お手元の資料の中にある「2009年度カッパ塾活動報告書」に記載しております。表紙の裏に「カッパ塾（K塾）趣意書」を載せておまして、冒頭に「早良で水辺の歴史と自然を考える会を始めます」と記載しています。報告書では、講師の先生の講演内容や質疑応答などを録音したテープを起こしまして、記録しておりますし、例会の様子の写真なども載せております。

本日は、最初30分ほど私から政治の話とカッパ塾の今年度の進め方について話させていただき、その後は、第2期の1回目の例会の基調講演ということで、私のお隣に座っていただいている施光恒（せ・てるひさ）先生をお願いしているところであります。

私が施先生を知ったのは、お手元の資料にある西日本新聞（2010年7月7日）の記事、施先生が書いた「『物語る力』回復する試み」というタイトルの記事を読んだのが最初であり、私の方から勝手に施先生に声をかけさせていただいた次第です。

この記事のコピーの資料の裏には、同じく西日本新聞（2010年7月13日）の記事で、施先生が書かれた「参院選、民主党敗北」というエッセイが載っています。

私は、施先生の「『物語る力』回復する試み」というタイトルのように、これまでのカッパ塾で語られたことをきちんと記録していこうと思い、今回「2009年度カッパ塾活動報告書」というのを、まとめさせていただきました。記録をきちんと貯めていくことによって、早良の思いなり、早良のスピリットなりを、つまりこの社会でどうしても守って行かねばならないもの、育てて行かねばならないものを、還元して、確認して、きちんと育てていく作業をやりたいと思って、カッパ塾をやっています。

今日は、施先生に来ていただき、ご案内のとおり、「早良の政治・哲学を考えるために」ということで、お話しさせていただくことにしています。九州政治哲学塾という名前を付けさせていただいていますが、これは英語でイニシャルをとってカッパという当てつけなのです。

私自身が「水辺からのまちづくり」「水かおる早良区」「心地よい時間が流れるまちづくり」ということを提唱させていただいています。水の流れというのは、地下水もあるのですが、目に見える形で私達が認識できる地域共有のものであります。水というのは、雨が降ってから海までずっと

繋がって流れていくもので、また水が流れれば間違いなく命が湧きだしてくるということがあり、そういうわかりやすいもの、そのわかりやすいものにまつわる歴史というか、人間との係わりみたいなことから、本当に核となって絶対壊してはいけないもの、守って強くしていくことによって新たな社会づくりの基礎、骨組みになるようなものを探していきたいと思っています。

自分としては、このように語っていて、上滑りしているような気がします、思いを語らしていただきました。

第2期のテーマ

今年度のことになるのですが、開催が遅れたことをお許しいただきたいのですが、今年度というか、第2期目を本日、施先生にお話していただき、前期と同じように4回程度の会をやりたいと思っています。

テーマとしましては、一つは早良の歴史ということを考えています。

今、私は入部の方に住み始めているのですが、すぐ入部の背中といいますか、荒平山というのがあります。中世に山城ができて、それが今どのように現在引き継がれているのか、そのあたりの話しを、今日もご参加いただいておりますが、早良の歴史に詳しいその方に、まだ正確にはお頼みしてないのですが、していただければと思っています。

それと、つい最近、神仏混合と言っはいけないのですが、お寺と神社が一緒になっているような場所のご住職さんというか、神主さんとお知り合いになりました。江戸時代から明治になって廃仏毀釈があったのですが、国家神道になる前のお話しがお伺いできるのではないかと、私自身、直感的に感じていまして、そちらからお話しをお伺いできないかと思っています。

それから、英彦山で山伏をやった方、大学の先生をやった方、今は退官された先生がおられます。わたくしが始めましたこの九州政治哲学塾の生みの親というか、私の恩師の上田という先生に、塾の最初の会に来ていただいて、講演の中で話していただいたのですが、その上田先生が、今、全国でやっております社叢学会（しゃそうがっかい）、鎮守の森を考える会であり、NP Oなのですが、その九州支部での会合でその先生とお会いしました。実を言うと、その先生は私の母校、修猷館高校の社会の先生だったのですが、習ったことはなかったのです。しかし、英彦山の修験道の関係の方だと伺っていましたし、大学でもそういう話しの教鞭をとってあったと聞いていましたので、早良というのは、川の源であります背振山を最高峰として油山から飯盛山までであるという地形であり、それが育んだスピリッツみたいなことをお話していただけないか、お願いしようと思っています。

それと、まだ思いつきで本当にそれが具体化できるかどうかかわからないのですが、私の方で準備させていただいた配布資料に、新聞記事をつけさせていただいております。西日本新聞の2010年8月10日号です。今日も参加いただいております田中恵山先生には、カップ塾の第1期目の2009年8月に、カップについて色々話しをお伺いしたのですが、室見川の河原橋に恵山先生が造られたカップが欄干を飾るということが新聞報道されています。カップ塾をやったからということではないかもしれませんが、そういうことを語り合ったことが、間接的にこのような形になって現れたのではないかなと思っています。その恵山先生の講演の時に参加された方も今日いらっしゃいますが、その時の記録がありますので、思い出していただければと思うのですが、室見川でカップにまつわる何かレクリエーションみたいなこと、お祭りまでに行けるかどうかかわからないですが、そのようなものやってみようではないかというお話をさせていただけたらと思っています。

それから、これはJAF（社団法人・日本自動車連盟）の機関誌の記事なのですが、岩手県の遠野が紹介されており、さっそく柳田国男の遠野物語を読んだら、カップのことがかなり出てきました。私はカップの話が出てくるとは知らずに読んだのですが、カップについていろんなことが書いてありまして、私の解釈によると、カップは貧しい時代に山に捨てられた子供ではないか、というようなことが書いてあったと思います。山の人、山神（さんじん）的な人が、今でもカップ釣りをやっている写真なのですが、実際に釣れるかどうかはご想像にお任せしますが、カップにまつわ

る話しは、恵山先生から、八代とか球磨川流域に結構あるという話しを聞いていますので、レクリエーションを兼ねて、そういった催しもできないかなと。さらには、カップ祭りがあるところとか、カップにまつわる話しが多いところに行ってみてはとも思っています。

それから、北九州には火野葦平さんがおられました。彼が住んでいたところは、河伯洞（かはくどう）というのですが、とにかくカップが大好きでカップの絵とか、カップにまつわることを色々書いてあって、だから一回、河伯洞に行ってみるとか、これ三つともやるわけではないですが、今日のような講演会の形式とは別に、外に出てみんなでカップにまつわることをしてみたり、見てみたりとか、色んなことをやってみたいなと思っています。

以上が、今、事務局で考えていることでございます。

市長選と市議会

さて、昨日まで市議会がありました。議会が終わりまして、選挙に入っています。選挙はご存じのとおり、来たる11月14日が投票日の市長選でございます。市長選の資料も入れさせていただいております。

ぜひとも私ども民主・市民クラブの話しを、あまり政治の話しはしたくはないのですが、この時期でございますので、少しさせていただきます。現実の政治がどう動いているかというのも、政治哲学を考える上で、やはり一緒に考えていただきたいと思っておりますので、ちょっと宣伝というか、私の思いを述べさせていただきます。

お手元でございます「数字で見る吉田市政の実績と成果」という資料の裏に吉田市長の手紙が載っていますが、市債残高を1300億円減らしたこと、中小企業対策をやったこと、それから不登校児童を二割減らしたこと、これらはなかなかメディアを通じて皆さんの耳に伝わっていないのではないかと思います。

市の財政から支出したお金は流れていく先がありますから、それをいただく方は、お金が多ければ多いほど反応していただけたと思うのですが、吉田市長は減らした方でございます。そのため、なかなか皆さんには実感していただけないところがあるのではないかと思います。市税収入が減った不景気の中で、地味ではありますが、これだけの成果を上げてあります。

子供施策に関しましては、議会の中で吉田市長の提案が2回否決されました。1回目は同数で議長裁決となったのですが、もう1回は、私どもの方から言いますと、財政を無視した修正案が別の会派から出されて、そちらが通ったということでございます。

私ども民主・市民クラブは、市議会議員63人のうちの10人でございまして、少数与党ということで、議会の中で、きちんとした多数派工作といった言葉の響きが悪いかもかもしれませんが、きちんと内容を伝えて理解していただき、議会で賛成していただくという作業ができなかったわけで、やはり私どもの力不足であったという反省を強くしています。

今回の市長選、吉田市長の再選をお願いするとともに、私ども民主・市民クラブは全区から新人を出すということで、候補者の擁立準備をさせていただいております。今は現職議員10人ですが、あと何人か上乘せして、20人を目標に、議会での勢力を作り出していきたいと思っています。

なかなかその通りにいくかどうか、選挙結果というものは、どうなるかわかりません。私自身も自分の選挙自体の総括がきちんと把握できていません。なぜ、こんなに多くの人たちが私に投票してくれて当選させていただいたのか、そのあたりのことの話しを今まさに後援会でやっているのですが、しかし、思いとしましては、行政だけが変える方向に動いたとしても、やはり議会も本当に変える方向に動いていかなければならないし、議会が変える方向に動けば、行政も変える方向に動かなければならない。これは今の政治制度の中では、なかなか難しいところがありますが、他の会派の動きなんかを見ると、どちらかという、私ども民主党ほどの積極的な議席に向けての力をつけることへの活動はやっていないのではないかとというのが、今の状況じゃないかと思っています。

そういった中で、私自身、市会議員として吉田市長を支え、そして福岡市議会をきちんと市民に納得していただける形で、皆様の声をきちんと実際の施策に反映できる形にもっていく、そのよう

な活動を政治の場でもやらせていただきたいと思っています。以上が、市長選に関することでございます。

スイスを調べてみて

もう一つ、カップ塾に結びつくことですが、どうしても一言だけ申し上げさせていただきたいと思っています。先ほどの「物語る力」ではないのですが、早良で水ということを直感的に思いついて、その中で「水かおる早良区」ということでやらせていただいているのですが、何が早良でいちばん大事なもののか、このカップ塾を通して私も考えていきたいと思っているわけでございます。私が今勝手に思っていることが、理屈に合っているかどうかわからないのですが、少しだけずれた話から始めさせていただきます。

上田先生と一緒に西郷義塾というのをやっていますが、上田先生が「西郷隆盛ラストサムライ」という本を日経新聞から出してありまして、このカップ塾の第1回目の講演のときに、その話をさせていただきました。西郷隆盛の弟さんである従道（じゅうどう）さんが、のちに陸軍中將、海軍大将になられた方ですが、明治政府を作るときに、スイスに行って、スイスの政治を学んであったという話があり、そこから上田先生の話しが始まりまして、スイスという国は山国で、日本に比べて水はないし、資源もない。日本の国土の7割は森なのですが、スイスは森林が35%、山が25%を占めるそうです。そういう中でスイスは、日本と同じように時計に代表されるような手仕事の精密機械の産業が盛んであり、日本とスイスは結構似ているのではないかと。そしてスイスには、騎士道スピリッツみたいなものがあるのではないかと。日本で言うと武士道かもしれないですけどね。国の周囲の状況は日本とスイスでは違うのですが、国の感じとしては、かなり近いのではないかと。ということで、今、調査を西郷義塾でやろうという話が出ており、玉井も参加しろと言われていました。2ヶ月に1回、大阪に行って語り合いながら、講義を聴きながら、スイスを研究しようではないかという話しになっています。

スイスの歴史を読むと、最初は三つの自治州が同盟を組むのですね。だから、言葉が三つあるのです。イタリア語、フランス語、ドイツ語、周辺の国なのです。あとはロマンシュ語っていうのですかね。人口の1%しかいない言葉があるそうなのですが、言葉を越えて国ができています。それで一つの国が出来ているわけで、永世中立国であり、国民1人当たりの国民所得は日本より高いのではないかという状況です。

言葉が違ってなぜ一つの国を創ろうとしたか、ということですけど、26の自治州があるのですが、20の自治州があつて、他に準州といって、半分の州が6つあつて、合計26と数えるようです。その州がすべて憲法を持っていて、地域でも直接民主制が行われたりするのですが、国ができる一番最初の起源は何かといたら、要するに、神聖ローマ帝国からの自由と自立だと思ふのです。自由と自立ということで、その同盟ができた。私はまだ何冊しか本を読んでないのですが、どこまで読んでも、そこで止まるのですよね、自由と自立で。何で自由と自立がなければいけないのか、実はよくわからないのです。そのため、実際にスイスを訪問しての調査研究におけるインタビューで、スイスの国務省とか、総務省とか、そんなところを訪ねることを念頭に質問づくりをしています。英語が少しできるので、文書を書いたりすることを、私もやらされているので、その根っこを捉まえないと。要するに命をかけてでも守る自分らの言葉というか、精神というか、そういうものをですね。スイスはEUに入っていないが、入りそうな雰囲気ですが、国連にも、できてすぐには入っていないですね。いや、入っているのですかね？本で調べているのですが、2010年の時点でどうなのか、本に載ってなかったの、調べなければならぬのですが、国連に入ること自体も国民自分ら考えてやるみたいなの、そういうところを突き止める勉強をしばらくしてみたいと思っています（2002年の国民投票で賛成が可決数を超え、国連に加入している。スイスは国民投票によって国連への加入を決定した唯一の国である）。

それがカップ塾とどうつながるのか、まだよくわからないのですが、私自身、今の日本を考えたときに、中国のこともありますし、どんな風にして我々が何を守りながら、何を育てていくのか、

そのような強固なものを作り出したり、見出ししていく作業ができないものか、ちょっと片意地張った話しになっているのですが、そういう思いがあることをカッパ塾の第2期目に当たって少し申し述べさせていただきます。

そして、そういう作業を私自身もやっているということ、そして言葉が、自由と自治、自立ということで、拠って立つ言葉があるというスイスという国が、今、実際どのような国状になっているのか、赤字が多いとか、いろんな話しがあるらしいのですが、この早良の地で、何かそのような、つまり、日本でもスイスみたいなものが出てこないかというのが、私が突き止めたいこととございます。したがって、本当に忌憚のない意見交換というのを、毎回こんな形で顔を会わせながら、カッパ塾で進めていきたいと思っています。（拍手）

●基調講演

（施）最初、玉井議員からお話があったときのタイトルは「早良の政治・哲学」だったのですが、自分の専門は政治理論、政治哲学、または政治思想ということで、かなり抽象的なことを専門にしております。早良に対する愛着は多々あるのですが、早良の歴史を盛り込んで話すというのは、私の能力を超えるかなと思ひまして、今日は、早良の歴史やまちづくりや政治のあり方、政治哲学になるのかもしれませんが、そんなことを考えていくときの枠組みというか、準備作業というか、そのようなものをお話させていただければと思います。

具体的に申しますと、玉井議員から私の以前の新聞記事を紹介していただきましたが、構想する力と申しますか、物語る力と申しますか、新しく何か、早良の政治思想でも、早良の将来でも、又は福岡でも、九州でも、または日本でも世界でも、何か新しいものを自分達の方から政治思想なり将来の社会の姿、国の姿を構想していくための力というのが、これは私見なのですが、最近、九州でも日本でも非常に落ちているような感じがするのですね。特に若い世代かもしれませんが、そういったことを回復するためにはどういったことを前提にすれば良いのか。物語る力と申しますか、構想力と申しますか、または想像力と申しますか、そういうものを回復するためには、またそれを力強いものにしていくためにはどうしたら良いのか。政治哲学思想は大学で研究していて非常に抽象的で、世の中に役に立たないようなところもあるのですが、そのようなものの立場から少し話させていただきます。

わたくし、今日、ここに呼んでいただいたのですが、残念ながら早良区民ではありません。生まれたのは城南区で、現在、住んでおりますのは、弥永団地というところでございます。

しかし、中学はこの近くの西南学院の中学でした。高校は玉井議員の後輩に当たるのですが、修猷館高校でした。よってこのあたりに6年間過ごしましたので、非常に愛着があります。玉井議員の事務所があります野芥ですが、私の実家は城南区の七隈ですので、野芥のあたりには、昔からたくさん友人がおりまして、時々、玉井議員の事務所に遊びに行かせてもらうのが楽しみです。

そういうことで、早良のまちづくりということに少し係わりを持っていただければ非常に嬉しいところであります。

サンデルの番組の流行

さて、実質的な話しに入っていきたいと思うのですが、資料を見ながら話しを聞いていただければと思います。まず1ページをめくって「二 サンデルの番組の流行」というところを見ながら話しを聞いてもらえればと思います。

先ほど、私の専門は政治哲学、政治理論と申し上げましたが、少し前までは、そう申しましても皆さん、ピーンと来ないようで、わかったような、わからないような顔をされるのが、自己紹介するとどうしても多かったような気がするのです。政治哲学理論というのはどうしても少々馴染みがないというか、わかりにくいものだったのではないかと思います。しかし、ここ最近なのですが、非常にある意味、説明しやすくなりました。皆さんご覧になっている方もおられると思いますが、今、NHKで、ハーバード白熱教室という番組をやっているのですが、ご覧になったことありま

すか？この写真にあります、少しニヒルな感じのするアメリカ人の、ハーバード大学のマイケルサンデルという先生が、政治哲学の思想を、現実の様々な政治に当てはめてみて、生活の中で実際に直面する非常に難しい事例を、考える道筋を、学生と一緒に議論するという番組であって、非常に好評を博しております。

マンデルさんの顔写真の右下に「これから正義の話しをしよう」という本が載っています。この本も最近すごく売れているらしいです。福岡でもジュンク堂とかでも、暫くノンフィクション部門で一位だったと思います。かなり固い政治哲学の本なのですが、非常に売れているということです。

ということで、政治哲学、政治理論ということで、私が専門にしているようなものが、非常にある意味、一般的になりまして、そういう意味では少々自己紹介するのが簡単になったところがあります。また、この本、非常に売れていまして、わたくしのたとえば大学の先輩で、名古屋の方で大学の教員をしている方がいまして、その方の話しでは、この本以外の、サンデルの本を翻訳しまして、非常に印税が入ったと。政治哲学理論を専攻していて、こんなことは初めてであると、そんなことを言っていました（笑）。

そういった意味でも、政治哲学理論といったものが、一般化したという点では、非常に恩恵を被っているわけです。もちろんそのような下世話な印税の話だけではなく、サンデルの番組は政治理論、政治哲学、政治思想というものを、ある種、一般的なものにしてくれたところがあるのですが、このサンデルの番組、ご覧になった方、わかると思うのですが、これ、かなり理屈っぽい話しをしておりまして、そしてこの本でもかなり難しい専門的な話しをしているのですが、この番組にしても、この本にしても、非常に好評を博していると思います。これ、なぜ好評を博したかと思えば、一つは、政治哲学というといかにも小難しい感じがするのですが、それをサンデルさんの場合は、わかりやすく、我々の生活に関係するものとして感じさせているところにあると思うのです。それが、この本にしても、この番組にしても非常に好評を博している理由だと思います。

このサンデルという、この学者は、今年の夏、日本にやって来ました。東京大学で、このハーバード白熱教室ならぬ東京大学白熱教室みたいなことをやってくれと、というような依頼を受けて、そして半分くらいはNHKの番組になったようで、そのような形で、東京大学の教室の一室で日本人の学生と一緒にハーバードと同じように議論をしていました。

サンデルさんの授業というのは、ハーバードで非常に人気があるのですが、どういうものかといえますと、少し難しい倫理的というか、哲学的な、だけど日常に非常に係わりの深い問を投げ掛けるのです。それをどう考えるかということを学生で、みんな、議論してもらおうというような授業なのです。

このNHKのハーバード白熱教室では、アメリカ人の学生達が活発に議論しているのですが、そこがなかなか興味深い、おもしろいということで、話題になっているわけなのですが、東大でも同じような形でやったのです。そのときにサンデルは例えばこのような問題を、日本人の学生に出しました。

資料①、朝日新聞の記事の抜粋ですが、これを見ながら聞いていただければと思うのですが、こういう問題を出したのです。イチロー、アメリカの大リーグ、マリナーズのイチローですね。彼の年俸は日本の教師の平均所得の400倍だと。そんなにもらっているのです。オバマ大統領、アメリカの大統領の42倍も、もらっていると。これは道徳的にみて公正であろうか。国家が課税して、再分配、福祉などに使うことは正しいことか。例えばこのような問題を学生に提示し、学生はいろんな感覚を使いながら、いろんな理屈を考えながら、この問についてどう答えるのか。例えば、資料①の新聞記事に書いてありますが、「個人が努力で得たお金なのだから、国が取り上げて再分配するのはおかしいのではないか」とか、または、ここには書いてないですけど、「貧しい人がいたら、イチローくらい稼いでいる人からは課税してたくさん取っていいのではないか」といった、そのような形で、自分達の感覚とか理屈とかをうまく使いながら、この問題について、答えを出していこうと。そういったことをサンデルは、アメリカでも、また日本でも東大の授業でやったわけです。これが好評を博したわけです。

政治哲学とか理論というのは名前からしていかめしい、小難しい感じがするのですが、この番組にしる、本にしる、ご覧になった方は感じ取ったと思うのですが、別に政治哲学とか理論というものは、また政治思想というものは、そんなに難しいものではない、また我々の生活からかけ離れているものではない、そうではなくて、逆に我々の生活の中で、そして我々の感覚をもとにして、そこから理屈を積み上げていくようなものであって、ある意味、生活の中にあるものだ。ふだん政治哲学とか思想とか聞くと、なかなかそう感じませんが、サンデルの授業の番組にしる、本にしる、そういうことを実感させたというか、そういう風にある意味、再認識させたところに好評を博した理由があるのではないかと思います。

「輸入学問」としての「哲学」、「思想」

次の「三 『輸入学問』としての『哲学』、『思想』」というところに参りたいのですが、わたくし、日本で政治哲学や思想を専攻する者として、少々反省しなければならないのは、日本では政治哲学や思想というものは非常に小難しいものだ、あまり生活に役に立たないものだ、という印象が強いと思います。これは一つに、どこに理由があるかと考えますと、輸入学問であることが大きいと思います。

英米圏だと、サンデルが大学でやっているアメリカの政治哲学、思想の授業というのは、ある意味、日常的な姿だと思うのです。日本でやる場合は、どうしても、私もその中の一人かもしれないが、欧米の思想とか理論を取り入れて来て、それに注釈をつけて、細かい批判をしたり、重箱の隅をつつくような議論ばかりをしている。研究者の内輪で論文を書くと、評価されたり、批判されたりと、そういうことで話しが済んでいる。例えば、本屋で政治哲学とか思想とかの専門書を見ると、あるいは大学で政治哲学とか思想とかの授業を受けたりしますと、多くの人々は非常に退屈で「何のこっちゃ」と、生活に遠い小難しい細かい議論をしていると思われると思うのです。これは反省しなければならないことと思います。

つい最近亡くなった著名な文化人類学者の梅棹忠夫さんという方がいらっしゃいます。その方は、京都大学で、文化人類学で非常に有名な方なのですが、今年(2010年)の6月に亡くなりました。この写真のサングラスをかけた方ですね。この方は生活に根ざした立場で思想とか理屈を考えているという立場の人で、今、申しましたような、日本の一般的な思想研究者というか哲学研究者のことを、ある論文で非常に痛烈に批判しています。なかなかいい言葉と思うのですが、一種の「たちの悪い輸入業者」であると。

資料③のところですが、梅棹忠夫さんが50年以上前に書かれた「アマチュア思想家宣言」という文章から引っ張ってきているのですが、こうことをいっているのです。なかなかおもしろい文章と思うのですが、ちょっと読んでみますね。「現代日本の産業資本家とプロ思想家」、プロ思想家というのは専門の研究者ですね。「一見、右と左のようだけれど、そのやり口には、よく似た点がある。どちらも、西洋の品物を輸入して、たいした吟味もせず日本人に押し売りしている」。こういう風な言い方をするわけですね。そして「たちの悪い輸入業者である」という風に切って捨てているわけなのですが、確かにそういうことだと思います。どうも日本で思想とか哲学とか研究していますと、原典を読みなさい、わらなくても原典を読みなさい、といった感じなのです。よね。

例えば、名前を忘れてしまったのですが、ドイツの思想を研究している方で、マックス・ウェーバーという人のことを研究されていた方ですが、こういう話しを昔されていました。その方は若いときに勉強していて、ウェーバーというドイツの哲学者の話がよくわからないところがあると。わからないから、先生のお宅に聞きに行ったのです。するとその指導教授の先生は、鉢巻をして出てきて、「僕は今ウェーバーの本を百何回、読んでいます」という言い方をします。その先生は、「君は何回、読んだのだね?」と。そしたら「先生、私はまだ2回目です」と答えると、「百回でも二百回でも読みなさい」と。そうすればわかるようになってくると。そのように根性で読めと。そのような話しをするのです。何か、日本の哲学とか思想の研究の仕方というのは、そんなところが伝統

的にあるような気がしますね。

もう一つは、西洋の思想とか哲学を学ぶときに、背景となる西洋の社会とか文化とかを丸ごと学びなさいということをよく言うのですね。丸ごと学ばないと思想とか哲学とかが、わからないと。だから西洋の文化や歴史にどっぷり浸かって研究しなさいと。よくそのように言われます。それはそれである種、職人的で評価できる部分もあると思うのですね。ある意味、日本人的といいますか、一種の思想研究のプロといいますか、職人としてそういう形で堅実にやっていると。そういうところは大いに評価できる場所もあると思うのですが、そうじゃないところもあるのではないかと。先ほど挙げました梅棹忠夫さんという人は、そればかりでは思想とか哲学の意味の一部しかとらえられないのではないかとこのことですね。

生活に根ざした「哲学」、「思想」の必要性

「四 生活に根ざした『哲学』、『思想』の必要性」というところをご覧になっていただきたいのですが、梅棹さんはこう言っていたのですね。「『哲学』、『思想』は生活のなかにあるべきもの」であると。で、「よりよき暮らし」のためにあるものではないか、そういうことを言っています。資料④を見ていただきたいのですが、なかなかおもしろい言葉使いをしています。こういうこと言うのですね。これはなかなかおもしろい激烈な言葉と思うのですが、こう言っています。「しかし、わたしたちは西洋人ではない」。最近なかなか言いにくい言葉なのかもしれませんが、「日本の土民である。日本の国土のうえに、日本の文化のなかに、日本の生活をいとなんできたところの、日本の土民である。土民には土民の生活があります。これは文句なしにまもらなければならない。思想もなにも、すべてのものはこのうえに築かれなければならない。日本において、思想家はあまり西洋のことを勉強しすぎた。いま必要なのは、日本の土民をみつめることだ。日本民俗学は、日本の思想家のおさめるべき必須科目である」と。こういう言い方をするのでですね。

要するに我々は文化、土地、風土から切り離されたものではないと。我々は、現代的な言葉ではないかもしれませんが、我々は土民であると。土臭い存在であると。そういうことを認識し直すべきだと。そのような風土に根ざした、土地に根ざした存在としての我々の生活の上に思想なり哲学なり、または理論なりを学ばなければならないのだと。だから、まず大切なことは、我々の身の回りというか、生活というか、風土というか、土地といいますか、そういうことを見つめることではないか。一つはそういうことを言うのですね。

もう一つ、資料④の下のところを見ていただきたいのですが、梅棹さん一流の激烈な言葉でかなり強く言っているのですが、こう言っているのですね。「プロの思想家たちには、土民の生活よりも思想の体系を保つほうが重大なのかもしれませんが、われわれにとってはめいわく千万な話である。西洋のものを排斥するのではありません。体系的輸入はこまる」。要するに西洋の文化とか歴史まで取り入れてきて、それがなくてわからないような取り入れ方は困るというのですね。そうじゃなくて、思想とか哲学とかを輸入するに際しては、土民の立場からの、つまり生活者といっているかもしれませんが、生活者の立場からの徹底的な日本化が必要であるのだ、と言うのですね。ある種、翻訳して土着化していくような、そのような生活の中にきちんと位置付けてくれるところまでやってくれないと、生活者の立場からは非常に困るのだと、そういうようなことを、言うわけなのですね。

「四 生活に根ざした『哲学』、『思想』の必要性」に戻っていただきたいのですが、「日本の暮らしに根ざしたものの必要性」、「日本人の生活感覚、皮膚感覚から出発」して、その上で理論とか思想とか哲学を築いてもらわないと困るよ、という言い方をするのでですね。わたくし、思想とか哲学の研究者のはしくれとして、しばしば思うのは、日本の学問のやり方といいますか、学問ではなくても、思想とか、ある何かの構想を考えたときの不十分な点とは、生活感覚とか皮膚感覚、自分自身のものに自信を持って、そこから出発して組み上げていくというのが不十分な感じがするのでですね。

例えば自分の専門の政治理論とか思想とかを欧米と比較してみますと、そこにも現れているので

すが、欧米の政治哲学、政治理論、政治思想とかは、よく読んでみると比喻が出てくるのです。比喻というか、たとえ話が出てくるのです。先ほどのサンドルの話しに出てきましたようにイチローがたくさん稼いでいると。そのイチローがたくさん稼いでいるのは公正か、正当なことか、それともちょっと不正なことなのか、というような話しが先ほどありましたけど、こういう問いかけは別にサンドルさんの授業だけではなくて、よくあるのですね。欧米の政治思想とか哲学とかの理論の本を読んでいると、そのような比喻が非常によく出てきます。例えば政治哲学の中でよく出ている例としては、イチローではなくて、なぜかバスケットボールのウィルト・チェンバレンという人なのです。玉井議員はバスケットボールやられるから、ご存じだと思うのですが、アメリカの伝説的なプレーヤーらしいですね（玉井「そうですね」）。非常によく稼いでいる人だと。よく英米圏の政治哲学を読んでいますと、イチローの代わりにウィルト・チェンバレンがよく出てきて、例えば今さっきの話ですと、非常によく稼いでいると。一般の労働者、会社員よりも何百倍も何千倍も稼いでいると。これは正当だろうか。国は取り上げて再分配して福祉とかに使っていいだろうか。このような比喻がよく出てくるのですね。

専門的なアカデミックな議論でも比喻を出してきます。または、これも政治哲学のアカデミックな堅苦しい哲学の本で、結構、本当にあるのは、宇宙船に乗って漂流して、誰もいない星に着いたとしよう。そこに百人着いたと。そのときに食料はあんまり無いと。どう配分すべきか。そんなような例え話からいくような議論が結構多いのです。

これはどういうことかという、読者に、読んでいる人に、これは正しいと思うか、読者の皮膚感覚とか、生活の感覚とか、ふだん使っている理屈から考えて、これで良いだろうか、悪いだろうか、本当に公正な社会をつくるためには、公正な制度をつくるためには、公正なお金の配分をするには、どうすれば良いのだろうか、考えてみようや、というような感じで、割と読者の感覚に寄って、読者自身が使っている日ごろの理屈に訴えかけて「私はこう思うのだけでも、こうじゃないだろうか」みたいな感じで理論を組み上げていくような議論をするのです。もちろん専門的な議論ですから、あんまり皮膚感覚で出発するとだんだんしつこくなるのですが、その理屈を吟味するのはやはり一般の読者の公正さの感覚というか、良いか悪いかという感覚から出発するのです。

だけど、日本のアカデミックな政治理論とか哲学の理論に目を転じますと、そういう議論はほとんどないのです。ただ、比喻とか例え話の替わりにあるのが、引用なのです。欧米のカントがこう言ったとか、ロックという哲学者はこう言ったとか、昔の聖書にはこう書いてあったとか。または昔のイギリスの政治家はこんなこと言ったとか、そういうような比喻が多くて、いや比喻というより引用が多いのです。引用して権威付けをして議論を進めていくというのが多くて、そういう意味で日本の政治思想とか理論とか哲学というのは読者の一般的な感覚、スタイルというよりは、引用とか、知識とか権威とかいうような議論が多くなってしまっているような感じがします。そこが、一つは、政治哲学とか理論とか思想とかいう言葉が、小難しく、一般の生活から非常に遊離しているものだと感じられる理由だと思います。そしてそういう言葉をあまり使わないからこそ、NHKのマンデルさんの番組が非常に受けている、本がベストセラーになっている、そんなところがあるのではないかと考えています。別にこれは哲学とか思想とか理論とか、そういう話しだけではなくて、我々の生活に関係あるところ、例えば新しい社会の構想とか、新しいまちづくりでも、国づくりでも、そういう構想力とか想像力とかいうところでも、ちょっと似たようなところが見えるような感じがするのです。

構想力・創造力を失った戦後日本

資料の⑤を見ていただけますか。梅棹さん、こういうことを言っているのです。「明治以来、日本の思想の一つの特色ある傾向として」、この言葉、最近ちょっと使わない気がするのですが、「採長捕短ということがいわれた」と。「つまり、外国の長所を学んで我が国の短所を補うというかんがえ」方であったと。「もう少し具体的な形では」、昔は「和魂洋才」といわれていた。けど終戦後、和魂洋才という中途半端なことを言っていたからいけないからだと。そこで最近

割と洋魂洋才みたいなのところがあるのではないかと。梅棹さんは、これは1954年の段階なので、戦後、間もない頃であったのですが、そういう言い方をしていたわけなのですね。梅棹さん、敗戦の経験に割と理由を求めていますけど、別に終戦の経験だけではなくて、私が思うところ、やはり近代の日本全体に明治以来というかな、そういうところに若干の自分達の感覚、欧米に比べた場合の、自分達の感覚とか、皮膚感覚、生活感覚に対する少しコンプレックスというか、自信の無さみたいなものがあつたような感じがするのですね。皆さんどうでしょうか？特にそれが、終戦後、強くなったところがあるような気がします。もう少し具体的な話しをしますと、ごく最近の話ですと、構造改革といわれるようなもの、構造改革は、そういったものが現れた、悪い形で現れてしまったものでなかったかと、今から振り返るとあるような感じがするのですね。

1990年代の後半くらいからですか、グローバルスタンダードという言葉が、最近言われなくなりましたが、一昔前、非常によく言われましたよね。何でもかんでもグローバルスタンダードであると。実は、結構アメリカ的な経済、市場経済のやり方というのが非常に大きかったわけですが、あまりそういうところを考えずに、これぞ普遍的なグローバルなやり方であると。日本の社会とか経済の仕組みとかは、こちらに合わせていかねばならないのだと。というようなことが非常によく言われていた気がします。ただ、一昨年、2008年頃、リーマンショックあたりから、やはり構造改革路線はちょっと間違っていたのではないかという見解が非常に大きくなってきている気がするのですが、まだ時々そのような構造改革路線という言い方をされる場合があるのですが、ここにも一つ、構造改革のときに、やみくもにグローバルスタンダードを受け入れてしまったところに、自信のなさ、生活感覚、皮膚感覚に対する自信の無さというところがあつたのではないかと私は思うのです。

その中で非常に興味深い話しをしている中谷巖さん、「五 構想力・創造力を失った戦後日本」の写真の人ですが、この人、竹中平蔵さんと並んで、構造改革の旗振り役だったので、一橋大学の経済学者だったので、この人、竹中平蔵さんと組んで、1990年代後半、構造改革をバリバリ推進していたのですが、一昨年、2008年頃、本を書いたのですが、「資本主義はなぜ自壊したのか」という本ですが、このとき非常に話題になった本ですが、この本の中で、ある種、懺悔したのです。構造改革路線はちょっと誤りではなかったかというような話しをしているのです。もちろん全部間違いではなかったが、かなり間違いの部分もあつたのではないかという話しを結構しているのです。どういうことを言っているかといいますと、資料⑥のところなのですが、読むと長くなりますので、私の言葉で言いますと、こう言うのです。今の日本の会社、企業は競争力を失っているのではないかと。競争力の源泉は職場の一体感であつたと。それが無くなりつつあると。それが非常にわかるエピソードというのが、なるほど思つたのですが、今、職場でボーナスの話しをするというのが難しいですね。私の職場もそうですが、九大でも色々な雇用形態の方がいるのです。ボーナスの時期にボーナスが出たと言えないですね。わたくし、事務の方も入っている職場のサークルに入っているのですが、そこでボーナス出たねと言えないですね。なぜかと言ったら職場の中には派遣社員の方もたくさんいらっしゃいますし、アルバイトの方もいます。公務員の日々雇用の方とか、色々な形態の方がいられるのです。だからボーナスの話しがタブーになっているのです。中谷巖さんもそのことをここに書いていまして、多くの企業ではボーナスの話しはタブーであるということになっています。昔、子供のときに見たサザエさんというテレビ番組では、ボーナス出ると会社の人と一杯飲みに行こうと、マスオさんはアナゴさんという人と飲みに行って喜んでいただけですが、そういう風景というのは、私のところ含めて少なくなつたのです。こういう身近なところからわかると思うのですが、日本の企業で一枚岩で一致団結するような雰囲気が無くなってしまっているのです。そういうところが、氷山の一角かもしれませんが、日本の企業の競争力とか、経済の土台となつていたものを、ある種ちょっと壊してしまつたところが悲しいかな、あるのではないかと。ここはやみくもにグローバルスタンダードとか、または、よく新聞のフレーズにあります、「バスに乗り遅れるな」みたいな形で、ちょっとやみくもにアメリカ的な規制緩和にしろ、雇用形態にしろ、あまりにも検討しないで無批判に輸入してしまつたと

ころがあるのではないかと。これは先ほどの梅棹さんの言葉でいうと、たちの悪い輸入業者みたいなところがやはりあったのではないかと思うのですね。この場合、構造改革の官僚にしる、政治家にしる、経済学者にしる、たちの悪い輸入業者みたいなところがあったのではないかと、というように思います。

これはある種、皮膚感覚とか、生活の感覚みたいなものから、新しいものを構想していくという当たり前のことがなかなか難しくなっている日本のこの現状。これはいろんなところに理由を求められると思います。いちばん大きいのは抽象的になって申し訳ないのですが、近代以降なのか、戦後なのか、それとも経済が悪くなってからなのか、よくわかりませんが、日本人の全般的な自信の無さが、謙虚さとは違うのでしょうか、自信の無さみたいなものがあるのではないかと思うのですね。極端な形で現れているものとして、これは私がよく引用するものなのですが、日本の近代の宿命というか、悲しいところかなと思うところで、私が授業とかで使うのですが、ちょっと古いですが、1997年の朝日新聞の社説。これ元旦の社説なのですが、おもしろい社説が載っているのですね。日本の現代というか、近代の多くの人々の意識を象徴的に表しているような気がして、ここで引用したいと思って引っ張ってきたのですが、こういつているのですね。

原因としての日本人の自信のなさ

資料⑦ですが、朝日新聞の1997年1月1日の記事です。元旦の社説ということで、朝日新聞がいちばん力を入れて書いた社説と思うのですが、この社説でこういつているのですね。桑原武夫さんという、京都大学のフランス文学者で、割と著名な人の言葉を引きながら、この社説ではこういつています。要するに日本の文化には三つの層があるのだと。日本の歴史、文化、伝統にはこの三つの層があるのだと。何かといいますが、いちばん上の層は、「西洋の影響下に近代化した意識の層」がいちばん上にあるのだと、その下に「いわゆる封建的といわれる古風なサムライ的、儒教的な日本文化の層」があると。そして、いちばん「下にドロドロとよどんだ、規定しがたい、古代からの神社崇拝といった形でつたわるような、シャーマニズム的なものを含む地層がある」と。ちょっとおどろおどろしい書き方なのですが、このような書き方をしているのですね。ちょっと常識的に今の話を表してみたのですが、これ「六 原因としての日本人の自信のなさ」に書いてあるのですが、一、二、三の層があって、この社説によると一番下にある根源的な層というのが、二番目もそうですが、特に三番目が得体の知れない危険な第三の層といえるのではないかと、いつているのですね、この朝日新聞は。この時の社説はですね、この第三の層が吹き出してこないように気をつけるべきだ、という社説を書いているのですけれども、これ、社説全体ではわからないことでもないのですが、この社説はちょっと不安になるところがあるのですね。感覚的に私も思うところがあるのですが、ちょっと自分自身に対する不信の念というかな、そんなところが大きく現れている感じがするのですね。いちばん根源的なところが、いちばん得体が知れず、ドロドロしたものであるのじゃないかと。ある種の恐怖感みたいなところが悲しいかな、あるのかなという気がするのですね。ここをやはり、どうにか、何というか、いろんなやり方があると思うのですが、自分の中に不安なものがあると、自分の中に見たくないものがあると、そういう不安定さをどうにか、いろんな形があるのでしょうか、そこと折り合いをつけるなり、違う見方をするなり、そこをどうにか改造するなり、なんらかの形で次の世代には、そういった不安感を無くしていつて、自分達自身に対する信頼感というか、自信みたいなものを回復していく必要があるのではないかと思うのですね。

「私達の生活規範」の回復のために

そこで「七 『私達の生活規範』の回復のために」というところに繋がるのですが、私達の生活規範の回復というのは、ひとつはカップ塾のテーマでもあるのですね。この私のレジュメのいちばん最後にカップ塾の趣意書を付けていますが、「言葉を集めるテーマ」に「私達の生活規範」というのがありますが、私達の生活規範というものを回復していくためには、何が必要かと。今日の私の話の最大のテーマなのですが、一つは今までの話の流れから、一つは自分自身を信頼す

る、それをどうにか回復していくことではないか、と思うのですね。感覚なり、ものの見方なり、倫理観なり、道徳観なり、または構想する感覚なり、そういうものに対して自信がもてるようにどうかかしていけないと、借り物になってしまったり、たちの悪い輸入業者になっちゃったりすることが多いのではないかと。

そしてもう一つは信頼を回復する手段と思うのですが、自分自身を身の周りから知っていくことが求められるのではないかと、思うのです。結局、私の言いたいことはここなのですが、自分自身を信頼し、自分自身を知ること、そういうことを努めること。当たり前といえば当たり前なのですが、そういうことが必要になってくるのではないかなと思うのですね。ここで「二つの提案」というところで書いたのですが、提案というか、具体的な方策として、個人的にこれが必要じゃないかと思っていることを二つ話させていただきたいのですが、一つは格好つけた言い方で、「ベネディクトの罨」といっていますが、これは特に偉そうなことを言う必要はないのですが、どういうことかといいますと、一つは、日本人はやはり特に戦後ですが、自分達の道徳観や倫理観にかなり自信を失ったところがあるのですね。その一つは、一人の責任にするには良くないのですが、ルース・ベネディクトという人がいるのですが、この人の影響がかなり強いのではと思うのですね。ルース・ベネディクトはアメリカの文化人類学者なのですが、皆さんも読んだことあると思うのですが、昔ベストセラーになったのですが、「菊と刀」という本がありますよね。日本の文化というのは、特に日本人の倫理観というのは、恥の文化であると。対照的に欧米の文化は罪の文化であると。ある種、対照して日本人の道徳観というのは、同調主義的で自律的でないという話しをしたのですね。

「ベネディクトの罨」、矮小化された「恥の文化」

「八 『ベネディクトの罨』」の「2 矮小化された『恥の文化』」の項目で、簡単に図式化していますが、こういっているのですね。要するに日本文化は恥の文化だと。恥の文化はどのようなものかといったら、他者の目を基準とする、ある種、外面的な道徳だと。だから日本人というのは非常に同調主義的で、他律的で、人の目を気にするのだと。これは今でも割とよくいわれることと思うのです。ベネディクトが別に最初というわけではないのですが、非常に影響力のある、この「菊と刀」という本の中で、日本は、欧米の罪の文化と比べて恥の文化であると、というような言い方をしたのですね。

対照的に欧米の文化、キリスト教的な文化ですけど、個人の良心を絶対的基準とする内面的道徳だと。欧米の文化は罪の文化だから、自律的で、心の中にきちんと自分を律する掟をもっているのだと。だから日本というのは、非常に同調主義的で人の目を気にして、自分自身の道徳観をもっていない、うつろいやすい国民なのだ。そういうことを戦後すぐベストセラーになった「菊と刀」という本の中でいったのですね。やはり、戦後、自信を失った日本人の心の中にある種、訴えたとところがあるのでしょうか。ベストセラーになって今でも非常に影響力があると思います。教科書にも載っているのですよね。九大の1年生に聞くと、教科書に載っていたかと聞くと、社会の時間に習ったというのですよね。今でも割とあるみたいなのですが、それに新聞の記事とかで、今でも若者言葉でよく「KY（ケーワイ）」という言葉ありますね。ちょっと前かもしれませんが、要するに空気が読めない。これ、非常に日本的であると、空気を気にしてという言い方をすると。これは今の若者でもこういう同調主義的なところが大きいあって、人の目を気にするということは変わってないのだということが、時々新聞でよく言われるのですけれども。これ、やはり日本人が自分達の道徳観とか倫理観といふかな、公正さの感覚が信頼できなくなっている、という一つの原因かなという感じが悲しいかなするのですね。

だけど、ベネディクトさんという人は、この「菊と刀」という本は全体的に見ると非常におもしろい本で、勉強するところがあると思うのですが、この恥の文化、罪の文化というのは、やはりアメリカ人であるのと、もう一つは、実は彼女、日本に来たことがないのです。日本に来たことがなくて日本文化論を書いているのですが、だから、あまりよく知らなくて書いているところもあるの

ですね。だから、あんまり真に受けてもいけないと思うのですね。私なんかは、日本の恥の文化は実はもっと良いものではないか、単なる同調主義の倫理ではないのではないかとと思うのですね。どうということかという、日本人の倫理観というのは、他者の目をいろいろ意識して、他者の観点に立って、自分の姿とか、考え方とかをいろいろ批判的に見ると。それも誰か一人とか、世間さまだけとか、またはある権威者だけとか、ではなく、色んな人の考え方、身近な人、遠くの人、そういういろんな人の視点をその場その場で敏感に内面化する、色んな角度から自分を見ると、それを覚えなさいよ、というのが、実は日本の倫理観じゃないかと思うのです。だから、恥の文化というのは、ただの同調主義とか、権威に従属するというだけではなくて、色んな人の観点を身に付けなさいよ、ということじゃないかと思うのですよね。

例えば、この話をするときには私の好きな、この話の論拠となる例としてよく出すのですが、例えば、日本人のお母さんが、母親が、子供が好き嫌いするときに、例えば、野菜を子供に食べさせたい、その時に何と言って躡けるか、心理学の研究があるのですね。教育学かな。アメリカ人の親と日本人の親の比較している研究がありまして、アメリカ人の親の場合は、ある意味、個人主義的というか、権威主義。アメリカの場合、教育は個と個のぶつかりあいというみたいなのところがあって、意外と、親は権威的にふるまうのですね。お母さんが食べなさいと言っているから野菜食べなさいと、というような言い方をしてみたり、または、もう少し論理的説明をする場合は、食べないと栄養が身に付かないよと、だから食べなさいと。アメリカ人の親の場合は、この二つが多いようなのですね。

日本の親は、アメリカとの比較でいちばん顕著に見られるのは、こう言うのですね、私の母親もそうだったような気がするのですが、この野菜はお母さんが一生懸命作ったのよ、食べてくれないと悲しいじゃないと、こういう言い方をするのですね。要するに母親の気持ちを子供に感受しなさいよと、読み取りなさいよというわけですね。または、この野菜を食べてあげないとお百姓さんに悪いのではないのとか、お百姓さんが汗水垂らして作ったのよと、そういう風に言うのですね。私の祖母なんかもそんな教え方をしたような感じがするのですね。この様な形で、ここで現れているのは、要するに日本人は子供を躡けるときに色んな人の気持ちとかを、反照させると。だから、何とかさんが悲しそうじゃないとか、またはお母さん悲しいわよとか、お姉ちゃんが泣いているわよとか、またはお百姓さんが悲しんでいるとか、そのような感じで人の気持ちを色々反照させることによって自分を見つめ直すことを覚えなさいよと、そんなところがあると思うのですね。そのようなことから、日本の恥の文化はただの同調主義ではなくて、他者の視点、他者の気持ちを配慮することを覚えさせることによって他者の観点から自分を批判的に見ることを覚えさせよう、そんなところが、実はあるのではないかと。そして色んな角度から自分を批判的に見て、自分の行為とか考え方を修正していくようにしなさいよというような、もっと深い意味があるような気がするのですね。

恥の文化の真価

それと、もう少し先に進みますと、「3 恥の文化の真価」と書いているところなのですが、もう少し深い意味がある感じがしまして、恥の文化は単なる同調主義とか、権威への従属なんかでは全然なくて、もっと深い意味として特に最近忘れ去られているのが、感受すべき配慮すべき他者の視点として、死者の視点とか、もっというと過去の人々の視点というのがあるように思うのですね。要するに今生きていくだけではなくて、昔、生きていた、過去の人々の視点、先祖だけでなく、昔の人の視点、そういう人の視点まで含めて、昔の人の視点ももっと感受しなさいという、何かそういうところまであったのではないかと思うのですね。この点、資料⑨を見ていただきたいのですが、「過去の人々の視点の内面化という願い」というところがありますが、これは柳田国男という、さきほど玉井市議の話にも出てきましたが、日本の民俗学というのかな、日本の昔の一般の人々の慣習なんかを調べて体系化した民俗学という学問を創った人です。昭和30年代に亡くなった方なのですが、この柳田国男さん、こういうことを言っているのですね。これはある種、当た

り前と言えは当たり前なのですが、こういうことを言っているのです。日本人の死者の観念として「私がこの本の中で力を入れてときたいと思う一つの点は、日本人の死後の観念、すなわち霊は永久にこの国土のうちに留まって、そう遠くへは行ってしまわないという信仰が、おそらくは代の初めから、少なくとも今日まで、かなり根強くまだ持ち続けられているということである」。

次の文章もざっと読んでみたいのですが、「日本を圍繞したさまざまな民族でも、死ねば途方もなく遠い遠いところへ、旅立ってしまうという思想が、精粗幾通りもの形をもって、おおよそは行きわたっている。ひとりこういう中においてこの島々にのみ」、日本列島のことですが、日本列島にのみ、「死んでも死んでも同じ国土を離れず、しかも故郷の山の高みから、長く子孫の生業（なりわい）を見守り、その繁榮と勤勉とを顧念しているものと考へ出したことは、いつの世の文化の所産であるかは知らず、限りもなくなつかしいことである。それが誤つたる思想であるかどうか、信じてよいかどうかはこれからの人がきめてよい。我々の証明したいのは過去の事実、許多（あまた）の歳月にわたって我々の祖先がしかく信じ、さらにまた次々に来るものに同じ信仰を持たせようとしていたということである」と言っているのですが、つまり日本人は、死者は近くにいと、山の上から我々を見ていると。

これが他のアジアの国々だと、死んだら黄泉の国に行っちゃると、あまり我々の近くにいないと考えるのですが、日本の場合は、山の上にいると。このあたりだと、背振とか宝満山か、そのあたりから見ていて、お盆になったら降りて来る、我々の近くにいるのだということを常に語ってきた。それは何を意味するかというと、子供に過去の人々の観点を気にしなさいよと。お爺ちゃん、お婆ちゃんも、草葉の陰から見ているよと。もっと昔の人も我々を見ているのだと。そうして、死者の観点を内面化することを、覚えなさいと言ったと思うのですが、「恥の文化」というのは、そこまで深いものがあつたのではないかなと思うのですね。これはどういうことを意味しているかということ、私の解釈が入りますが、おそらく日本人は子供に、あんたたちは自分だけで生きているのではないよと。色んな人の観点から自分を見て、いろいろ自分の行為とか思考を批判しなさい、批判的に反省しなさい、そして今生きている人だけではなくて、昔の人の観点からも見なさいよと。そして歴史的な繋がりの中で、我々は今後何をすべきか、どう生きるべきか、過去の人を汲み取りながら今何をすべきかということを考えていきなさいという風に。ある種、立体的に、同時代だけではなく、過去の人々の視点から将来を見通すような、今、私達は何をすべきかということを考える、反省能力というか、自省能力というか、そういうものを身につけよと教えたかつたのではないかと、思うのですね。

だから「恥の文化」というのは、単なる同調主義どころか、それくらい実は深い意味があるのではないかと思うのですけども、いかがでしょうか。例えば、その様な形で、日本人は、私が言いたいのは、もっと自信を持っているのではないのでしょうか、ということですね、要するに。もう少し自信を持って我々が日常に当たり前だとか、あまりたいしたものじゃないとかと思っていることも、よく考えてみると、実は深い意味があることが結構多いのではないかと思うのですね。ですから、もうちょっと我々が昔から受け継いできたものの中の意味を見いだして、大切にして、自信をもって自分達の発想とか、自分達の構想とかを考えていく、という必要性があるのではないかと。そういう、ある種の自信というものがあれば、構想力とか想像力がもっと膨らんでいくのではないかなと。

もう一つは、歴史的な観点、今言ったような過去の人々の視点から我々を見据えると、将来を見通せるようになるのではないかと。ある程度、そこらへんのところも必要ではないかと思うわけです。

カップ、水辺への注目

あと、カップの話しを少し（玉井「ぜひぜひ」）。時間もないので、少しばかり、極々。カップ塾ということもありますし、前にここで話しがあつた上田篤先生の本をちょっと読んだのですね。玉井市議から事前にいただきまして、カップ塾での以前の上田先生の話を読んだのですが、これ、非常におもしろいことが色々書いてありまして、上田先生は、水辺、早良区だったならば、室見川

とか、樋井川ですかね。いや、もっと上の方の川、上流の方ですか、水辺に人々の共同体ができて、人々の繋がりというのは、水辺という形で自然との係わりの中で人々の生活とか繋がりを考えていくべきだという話しをなさっているわけなのですけども、これ、わたくし、非常におもしろいと思ったのですね。

例えば、ちょっと理屈っぽくなりますけど、ウイトフォーゲルという中国研究者がいるのですね。ドイツ生まれのアメリカの学者で、一昔前の人なのですけども、中国の歴史とか経済を研究したウイトフォーゲルさんという人がいるのですね。この人、「水の理論」といわれるような、水に注目して、社会とか文明の成り立ちを語った人なのですね。

この人、どういうことを言ったかという、例えば中国みたいな大陸国家は、治水、灌漑の必要性、なぜかと言えば、黄河にしる、長江にしる、馬鹿でかい川があると。これを農業に役立てたり、洪水を防いだり、治水・灌漑をするためには中央集権的な、馬鹿でかい巨大権力国家を作らざるを得ないと。そして、灌漑するためには、大変な人手が要るわけで、そういうことをやるためには、私的な所有権など認めてもらえないと。中国は自然的な条件から、水の係わりから、強大な官僚機構を造る、ある種の、専制的秩序を歴史的にいつも必要とするのではないかと、いうのですね。今でも、三峡ダムを見るとそうかなと思うのですけど。よく言われることなのですけど、中国はそんなに歴史的に村落共同体があまり発達しなかったわけですね。村の自治というのは、日本のような形で行われた歴史がないわけなのです。あっても非常に乏しいものなのです。ウイトフォーゲルに言わせると、対照的に西欧とか日本とかは、川が小さいと。特に日本の川は中国に比べると、ちよろちよろしたようなものだ。そのような川を利用するというのは、そんなに難しいことではないのですね。一つの集落くらいの単位で、治水・灌漑を行えると。そういうところでは、割と村落の自治というのが発達すると。村単位で人々が社会を作って、ものごとを決めていこうという意識は生まれてくるはずだ、という話しをするのですね。それによって、西欧とか日本は、村落を中心とした分権型の社会ができてきたのだと。大雑把ですけど、そのような話しをするわけです。

ちなみに今、尖閣の問題がある時に読むとおもしろい本なので、ちょっと紹介したいのですが、集英社新書に中国の方が書いた本で、一橋大学の王雲海という中国人の、永く日本に住んでいる先生が書いている本です。「権力社会・中国と文化社会・日本」という本があるのですが、中国の方が書いたので、若干、中国びいきのところがあるかなと思いつつ、納得する部分も結構多いのですが、基調的には、ウイトフォーゲルと同じようなことを言っているのです。中国では、すべてのことを政治が決定すると。中国は政治以外なにもない社会だと、というような言い方をしているのですね。要するに中国には、法治もなければ、政治権力を離れた慣習とか伝統とか文化とかもあんまりないと。すべてを政治が決定せざるを得ない社会だと。

これは昔フォーゲルが言っているような形で、ある種の自然的な風土から、そういう伝統が生まれざるを得なかったのだと。これだけ聞くと王雲海さんは中国人なのに非常に中国に批判的でないかと思うかもしれませんが、ご覧になったらわかるのですけど、この本、そういうところから出発しつつ、そんなに中国に批判的な感じがしない不思議な本なのです。それはともかく、逆に王さんは、日本は文化社会だというのですね。この場合、文化というより、慣習とか習慣とか、人々の自然的、自生的な秩序といったものが重視される社会なのだという意味で、文化社会という言い方をしているのですが、日本の場合は政治権力というよりは、どちらかという人々の自然発生的な調和を保とうとする意識ですね。それによって保たれているし、動く社会なのだということです。これはなかなかおもしろい対比なのですね。中国の場合は、政治権力が崩れてしまうと、社会が無秩序になってしまうと。バラバラになっちゃうと。だから共産党が必要なのだと。日本の場合は、逆にここ何年間、毎年、首相が替わるし、いつも支持率が低いと。だけど社会はあんまりびくともしてないと。逆に政治権力よりも社会の方が割と主導しているみたいな話しをしているのですけど。最近のあれ見ると、尖閣の問題もそうですけども、なんとなく納得するところがあるなど。

まとめ…早良の政治・哲学を考えるために

それはともかく、まとめに入らせていただきますが、結局、今日、私が申し上げたかったのは、構想力とか、想像力とか、我々はもう少し発揮していいのではないかと。自分達の良い社会というのを、私とか私以下の世代の者に言うべきなのではないかと、草食系じゃなくて、もっと肉食系的に、自分達の良い社会を一生懸命つくろうやという気概を持つべきではないかと。そのためには、ひとつは、自分自身を知り、自分自身を信頼し、自信を持って我々が受け継いできたものを、慣習とか伝統とか考え方もっと信頼して出発して良いのではないかと。

もう一つは、過去の人々の視点、これも色々視点があるでしょうが、そういうものを感じ取って、過去の人々の視点を知るということは、そこから自分を見ることに繋がることによって、歴史の中では、我々は何をすべきかということに繋がっていくと思うのですね。そういう意味で、ただ本を読むということだけではなくて、もっと過去の人々の思いを色々な場面を感じ取るような作業とか教育とかが必要になってくるのではないかと。その意味で、このカッパ塾の試みは大切なものになってくると思います。そういうようなところから、早良の政治哲学って、そんな個別的なことはほとんど言っていないのですが、そのような形で土地に根差したもの、考えてみることはできるのではないかと、ということで終わります。（会場から拍手）

●質疑応答

（玉井）ありがとうございます。2期目の1回目に施先生に来てもらって良かったなど、改めて私自身思っています。せっかくお集まりいただいているので、ご意見でもご質問でも結構でございます。

（参加者から質問）カッパについて、お聞かせ下さい。

（施）カッパというのは、勝手な思いつきなのですが、日本人の水とか川に対する思いとか、イメージじゃないかと思うのですね。割と子供と遊んだり、時々大人とも話したり、時々仲良くして子供とも遊んでくれるようなものであるけど、子供の足をひっぱっちゃったり、尻子玉を抜くとか、そういうようなこともすると。普段はつきあっているのだけれども、時々ちょっとおっかない面もあると。そういうような形で、日本の川や水辺に対する思いとかが、表象されているのではないかと思うのですね。

逆に、例えば中国では、水辺というと、何を表すかと思うと、例えばドラゴンとか、ある意味、人間と隔絶していて、非常に遠い存在としての。だからカッパというのは、非常に日本的な水辺の象徴みたいな感じがします。中国の場合はドラゴン、龍になるのかなあという気がするのです。そういう意味ではカッパ塾というのは、我々がある種、掘ってたつ川辺とか、集落の基礎となっているようなものを表している、非常に良い、この勉強会の象徴としては非常に良いものではないかと改めて思ったのですが。

（参加者から意見・感想）一晩中、話を聞きたいような感じがするのですが、うちらも戦前の人間ですが、アメリカに占領されてね、黒船以来、常に外から来るものに壊されて、自律的でなく、外からの影響で国を造ってきたわけですよ、島国で。最近非常に評判になった内田樹（たつる）さんの辺境論ってあるでしょ。辺境論は、日本は要するに、世界のはじっこにいて、全ての良いものは、みらいかなえもそうだけれども、海の向こうから来る、天孫降臨にしても、上から降ってくると、そこから来るという思想があって、日本人は、辺境論の中で、他人の目を気にするわけなのですよ。辺境にいるから、大陸はどうだったのだろう、大陸の人はどうだったのだろうかと。

日本人論というのが多いのは、自分の国のことをいちばん多く語るのは日本人だからそうです。それはね、私が思うに、一つの考えなのですが、日本人は縄文時代に、いわゆる多神教だったわけですね。さっきおっしゃったように、子供の頃、お婆さんからてんとう様が見ていると言われた。何でもおてんとうさんが見ていると。悪いことしても、ご飯を残しても、ご飯なんかはお百姓さん

が苦渋辛苦で作ったものだから、大事にせないかんと。食べなければいかんと。残してはいかんと。茶碗も洗って舐めるくらいにせないかんとと言われてきたわけですよ。そのような文化がアメリカに壊されてしまった。

日本の多神教というのは、いちばん影響しているのは仏教でもキリスト教でもなくて、宗教はなんでもいいのですよね。本当に信じているわけではないけれども、道教に多神教がくっついたと思うのですよ。日本人がいちばん持っているのは、いわゆる無の思想ですよ。日本は四季の災害が多くて、いくら建てても、今度もそうですけども、大水が出たり、台風が来たりして壊れてしまう。永久的な石の文化ではなくて、泥の文化である。壊れるから、無常観なのですよね。日本人の文学のいちばんのものは何だったかという、もののあわれなのです。人間というのはあわれだと。だから天の掟によって生活しなければならないと、こう思うわけですよ。

だから昔の縄文人がいたのに、それを追っ払って弥生人は米を持ってきたわけですよ。水田耕作を持ってきた。蚕、養蚕をもってきた。それによって、今、日本は弥生人の人達の弥生文化なのです。日本人がもともと持って生まれた、施先生はそれをドロドロと言ったでしょ。このドロドロが、日本人のもともとではないか。もう一回、岡本太郎なんかそうだけれども、縄文文化を見直そうと言っている。縄文人が、本当、日本人の心の底の根底にあるけど、アメリカに負けて、みんなそういうものが壊されたわけですよ。自信がなくなっちゃって、どうして良いかわからないのではないかと思うのですよ。

仏教というのは空の思想なのです。中国から来たいわゆる日本人がもっている道教の思想というのは老荘思想ですね。これは無なのです。要するに。それはしかも循環するのです。世界は循環すると。また元に戻ると。さっき、先祖の魂はその辺にいておっしゃったでしょ。それは「あらたま」と「にいだま」といって、死んだあとに子孫が供養しなければ浮かばれない、浮かばれなくてその辺をウロウロしていると。だから鹿児島なんかに行くと、田の神さあで、神様はいつもすぐ近くの山にいますよ。遠くじゃないのですよ。そして田植えのときに降りてきて、そして宴会が終わるとまた帰っていくと。そういう意味で田の神さあ、なのです。日本人が持っている村落史的なものだけでも、縄文時代は、縄文の家というのは、自分の先祖は足の下に埋めたのです。そのうえに家をつくったのです。弥生人は自分達の部落の外に墓を作ったのです。外に作って自分たち生きている人間の住まいというのは、先祖と離れたところにあり、そこに住んでいるわけですね。

そう意味からいうと、日本人はここでもう一回再構築しなければならないかなあ、と思うのです。そういうものが、今までは辺境の民で、自分達は村社会で収まっていれば良かったのですが、いまはどうして良いかわからなくなった。世界が一つになってしまった。すぐ情報が入ってくるわけですよ。ですから、先生、これからの日本人というのは本当に自分達の文化を創っていかねばならない時に来ているのではないかと思うのです。例えば日本人はブランドものが非常に好きでしょ。昔の、それこそ石器時代から日本人というのは、例えば、黒曜石という、例の石があるでしょ。矢尻を作ったりする。あれなんか、日本の国内で幾つかできるけど、いちばんいいものを採るためにわざわざ遠くまで行って、それを発掘するわけですよ。それと同じように、今の若い人はブランドが好きだから、パリに行っても、どこに行っても、例のブランドものを。銀座なんかに行くと、今、ブランドの店ばかりになっちゃって。そういう意味で日本人は外から来る権威に弱いのです。これを何とかして、再構築したら良いのではないかと。私は歳だからできないけど、今、これからの人は、そういうことを考えてもらいたいと思っています。混乱しちゃっているのですよ(笑)。

(施) 貴重なご意見、いろいろありがとうございます。

(先ほどの意見・感想を述べられた参加者) 私も民俗学がいろいろ好きなのです。宮本常一をもっとも愛好しています。柳田国男とはちょっと違うのですが、折口信夫とか、宮本常一とか、本当

に足で歩いて、実際に農村の、歩きながら技術指導もしていたのですよ。佐渡なんかに行くと、干し柿なんか作ってくれたりしているのですよね。喰うために。そんなのが非常に大事なので。

(施) ありがとうございます。私も、そういうところを見ながら、未知数なものを、ある種、受け入れて、自信を持って行くということにならないのかな、と思うのです。ある種、縄文的なもの、ドロドロとしたもの、そういうものを怖がらず、ある種、そういうものも自分のものだと思いつつ、そこから出発するしかないのだと。なかば開き直りの姿勢が必要ではないかと思うのです。今、ご指摘いただいたことは、そういうことだと、私は理解しているのですけど。

(玉井) 他に何かありませんか。

(参加者から意見) 先生の話、始めは固かったですね。段々柔らかくなってきて、身に付きました。話しを聞きながら、十五分くらい喋られたときに、「菊と刀」を頭の中に描いたのですね。資料を見たら、ちゃんと書いてありますよね。それを見て思いました。やはり第二次世界大戦の時に、アメリカは日本の文化とか、いろんな思想とかを調べて、日本人は大將さえ倒してしまえば滅びるという研究をして、第二次世界大戦が始まったわけですね。

それともう一つですね。ケネディ大統領がいちばん尊敬していたのが、上杉鷹山(ようざん)。だから玉井市議にもお願いしたいのですが、今の政治家、特に吉田市長さんには上杉鷹山をしっかり読んでもらって、そういう政治をしてもらったら良いし、玉井市議には、早良の人達が何を求めたかということを実際に調べていただければと思います。

(玉井) ありがとうございます。他にございませんか。

(参加者から意見) 11 ページの柳田国男さんの文章からですかね。恥と罪の問題ですかね。歳とっていますが、子供の頃はね、親から聞くは一時の恥、知らぬは一生の恥と常日頃いわれたわけですよ。将来、文系と理工系では、また考えは変わってくると思うのですが、ここに書いてあるのは、恥は他人の批評、人を小馬鹿にするとか自分のミスに対する反応なのであると。人は人前で嘲笑され、拒否されるとか、あるいは嘲笑されたと思ひ込むことによって恥を感じる。

僕はですね、個人の独断と偏見ですが、後でゆっくり読んでみないとわかりませんが、恥というものは、今度、小沢さんの件が、いま検察から訴追されているが、これはおそらく無罪になると。それでも恥は一生続くわけですよ。罪は消えれば今はドライになってね。僕は、赤恥をかくというが、恥はそれほど誇大化することじゃないのではないかと。むしろ大事にするのは、罪のことを大事に、もっと大きく言わないと。

だんだん世界の国も日本も含めて、近代化、高度化されてくると、恥が上に行って、罪が下がってしまうと大変なことになってしまうのですよ。裁判によって罪にならなければ、どうでもいいということになるからですね。このへんは、僕としてはちょっとこれ以上は言わないで、反論を考えなければならぬですが、また次の機会にでもですね。ずっと続けて考えていきます。恥はいくらでもかいても良いと思うのですけどね。

(施) これ、ベネティクトのところのことですよ。私もこのベネティクトの理解は間違っていると思うのですね。日本人はやはり、先ほどの方がおっしゃっていましたが、おてんとう様だと思のですよね。おてんとう様が見ているというのが、おてんとう様の視点を意識するのが、実は日本人ではないかと、わたくしは思うのですけど。そういう意味で、おてんとう様に対する恥というのが、罪じゃないかと思うのですよね。そっちの方が、やはり日本人は伝統的に重視してきたのではないかと思うのですけども。そういう意味で、ここで引用しているこのベネティクトの議論というのは、わたくしは間違いだと思ってですね。間違いというか、こんな一方的なことを言っていると

いう意味でここに書いていますので。そういう意味で、ここに書いてあることはたぶん間違いだと思えます。

(参加者から) アメリカでも最近出ている本では、こういうことはないと言っていますね。

(施) 日本でも、「菊と刀」に対する反論があるようです。

(最初に意見・感想を述べられた参加者) 西欧人、いわゆるヨーロッパ人は一神教でしょう。それは一つの神。それは権威あるわけですね。日本は多神教で、要するにたくさんの神。一神教というのは、本当かどうか知らないが、神が人を創っているのですよね。だから人間が死んでも神はいるわけですよ。権威があるわけですよ。

日本人の場合は、神は人が創った。人にあるわけですよ。その人が死ぬと、その人の神は死んでしまっていないのですよ。そういう意味からいくと、インドのような多神教の世界の方が、人類をこれから救うのではないかなと、自分では思っているのですけどね。

一神教は、イスラムもユダヤもキリストも同じ宗教ですよ。全部一つの宗教ですから。分かれただけですからね。

日本人の場合は、辺境のために、何でも良いついていうのか、キリスト教が来ればステンドグラスが綺麗だから信仰してみるかとかね。そういう異宗教好きですよ。仏教が来れば、仏教は非常に権威があって良いと。大仏を造ったりなんかして、立派なお寺さんを造るでしょ。実際には、日本人は大自然が神様で、要するに自分が死ぬば皆無くなると。要するに無になると。そういう意識じゃないかと。その辺から日本人の生活基準を作っていけば良いではないかと思うのですけどね。どうなのでしょうかね。

(施) そうですね。私もそのあたりかなと思いますけども。

(玉井) では、時間も迫って来ましたので、最後に一つだけ。ご質問、どなたか、ございませんか。

(会場から質問) 玉井さんに対しても良いですか。

(玉井) はい、どうぞ。

(会場からの質問) 今、吉田(市長)さんが1200億円の削減って言われていますが、見てのとおり、市債残が減っているわけですね。

(玉井) そうです。

(会場からの質問) これは吉田さんの大方針になって減ったのですか。それとも今までの流れの方針で減ってきたのですか。もし、その1200億円が返済されたとしたら、何をもって返済していったのですかね。何を仕分けして、残高が減ったのですかね。にわかには1200億円ということが言われていますけど。それはよくわからないのですか。

(玉井) 実際、始まったのは前の市長の山崎さんから始まったという話しは確かにあります。

(会場の質問者) なるほど。

(玉井) 実際、どうやって減らしていったかという、いろんな事業を見直したということでしょう。

うが、どこをどう仕分けしたという話しというのは、正直言って難しいですね。

(会場の質問者) あんまり無い。まあ、玉井さん、言いにくいでしょうけどね。

(玉井) マイナスシーリングをかけていったということだと思います。

(会場の他の参加者) 公共事業費を落としたのですね。

(会場の質問者) それは吉田さんがですか。吉田さんの大方針によってですか。今までの流れでしょ。

(玉井) 前の山崎市長さんの時からですね。

(会場の質問者) そうでしょ。

(会場の参加者) 前の山崎市長の時から削減するという方針がありました。

(会場の質問者) という方針がありましたよね。

(会場の参加者) 山崎市長というより、役所の偉い人達の方針なのですね。それがオリンピック誘致になって変わってしまった。

(会場の質問者) 吉田さん、他にやったこと、ないのかなあと思って。私が思うに、玉井さんは言いにくいと思うが、これだけ乱立してくるというのはみっともないですね。立候補者がこれだけたくさん出るということは、何か不満があるのでしょ、要するに。本人はどう思っているのでしょうか。やる気あるのですか。

(玉井) それは、充分にもってあります。

(会場の質問者) 今の市長ねえ、なかなか決断が、最終まで出るという決断が遅かったみたいですけど。少し迷いがあるんじゃないかと思うのですね。よ～しやろうという意気込みは感じるのですか、周り見て。玉井さん、言いにくいでしょうけどね。

(玉井) 吉田市長が思っていることを前面に出せる、そういう状況をつくらなければ、駄目ですね。そういう状況を作らないと、市長が何を言っても野党から足を引っ張られるだけです。

(会場の参加者) 要するに民主党の議員が少ないじゃないですか。吉田さんがカラーを出そうとしても出せないのですよ。やろうと思っても議会で否決されたら、どうしようもないのですよ。

(玉井) 山崎さんは最初の市長選の時、民主党も自民党も推す桑原さんに対抗して、開発推進の行政を見直すということで勝った。ところが、この山崎さんを、民主党も自民党も2期目は推したのですね。2期目を推したから、オリンピックという話しになったかもしれないですね。今の状況の中では、議会で与党が多数派にならないと、市長がどんなに言ってもできないのですよね。その辺のところは、私とその担当の一員になって、民主・市民クラブと吉田市長のマニフェストのすりあわせもさせてもらいましたけど、その中で、マニフェストは結構分厚いんですけど、ご覧になっていただいて、結構何十ページもあって長いのですけども、要するに、そこに書いてあるとおり、元気

な街、日本一ということで、これだけは守ってもらわねばと思っています。よろしいですか、そういうことで。

すいません。市長選ということで、急に生々しい話しになりましたが（笑）。

何もわからずに、政治哲学みたいなことを上田先生が考えようということで始めましたが、これがなかなかおもしろい、よく理解できてないけど、とにかくおもしろいなあという感じで一年経ちました。2年目に、今日、施先生にお越しいただいて、正直申し上げまして、施先生と出会ったのはカッパ塾にとっても非常にありがたい出会いではなかったかと思っています。

30歳代の政治哲学者が、九州大学という身近に、おまけに早良のそばにいらっしゃる。早良での経験もおありになるということでございますので、私どもとしては、勝手に、いろいろカッパ塾のプログラムとかですね、早良でものを考えるときに、オブザーバーになっていただければと思っ
ていまして、そういう形で先生には、しばらくちょっと、つきまとわせていただこうかと思っています（笑）。

あらためまして、今日は久しぶりでございましたので、こんなに参加していただけるかどうか、ちょっとおずおずと始めたわけでございます。

長引いたことを、間があいたことを、反省させていただくとともに、第2期目の、私の選挙じゃなくて（笑）、吉田市長の2期目じゃなく、カッパ塾の第2期目をきちんとまた、言葉集め、歴史、それから早良から社会を考えていくということを、やっていきたいと思ひます。

本当にありがとうございました。それから最後にもう一度、施先生に貴重な話しをしていただきましたので、拍手をいただきまして、終わりたいと思ひます。（拍手）